Alternative Tokyo

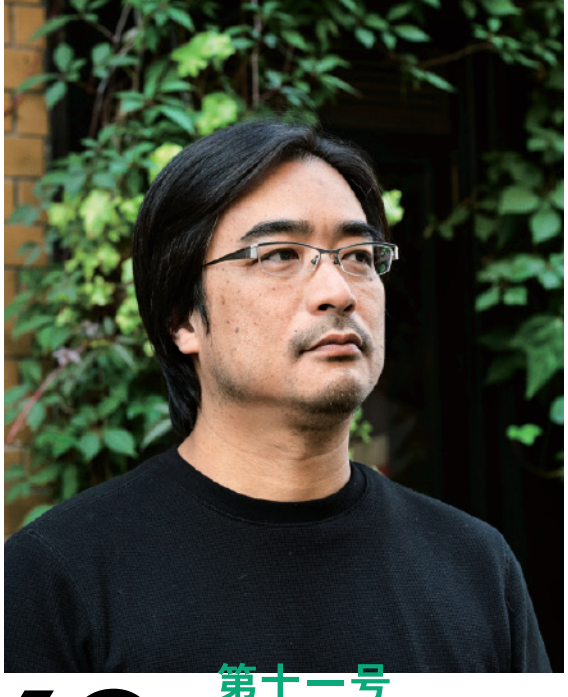
TOKYO PAPER for Culture

トーキョーペーパー フォー カルチャー

第十一号
011

一概には言えないこの世界で

岸政彦（社会学者）
石川直樹（写真家）
寺尾紗穂（シンガー・ソングライター）



Masahiko Kishi

Naoki Ishikawa

Saho Terao

オルタナティブトーキョー

研究テーマ⑪
東京、この街の手触りを探して

アツカン通信：
日比野克彦（アーティスト）

「多様性」という言葉は実に機能的だ。例えば大切な友人と喧嘩をしたとき。仕事先で納得のいかない出来事があったとき。「人は自分とは違う。多様だから」と、自分を納得させる手段にもなる。でもその一方で、多様性は人の思考を停止させることもある。なぜなら相手との関係性を「多様である」と片づけることで、その先にある、自分にはなかった世界や視点に気づくチャンスを失うことにも繋がるから。自分とは決定的に違うもの。その違いの先にあるものにちゃんと触れることで見えてくる世界が、どうやらある。その世界をどれだけこの街で広げられるだろう。

The word “diversity” is really quite useful. When you quarrel with a valued friend, or when something happens at work that you just can’t stomach, the word is a handy means of self-persuasion: “Well, not everyone’s like me,” you can say. “People are diverse.” At the same time, this notion of diversity can also close off further thought. Once you sweep your relationship with someone under the rug of diversity, you lose the opportunity they offer to discover a world-view or perspective that’s new to you. There are worlds that can be seen only after you take the next step and really come into contact with the decidedly different. How far and wide can we extend such worlds in our city?

2015 DECEMBER
ELEVENTH ISSUE
011
- - -
東京の文化を研究する
フリーペーパー

一概には言えない

この世界で

In A World That Resists Being Wrapped Up Neatly

そのルーツは江戸時代まで遡れる築地市場。
開設から約80年が経った今も、日本の食文化を支え、作り上げている築地市場には、
日々世界各国から多種多様な人たちが訪れ行き交っています。
まさに文化の交差点とも言えるこの場所から、「多様性」を入り口にした鼎談がはじまりました。

The Tsukiji Market has roots dating back to the Edo Period.
Even today — eighty years after its establishment — the market continues to sustain and inspire Japanese culinary culture even as it draws a wide array of visitors from all around the world every day.
Our roundtable begins by talking at the market, a true "crossroads of cultures," about diversity.

石川直樹
写真家
Naoki Ishikawa

岸政彦
社会学者
Masahiko Kishi

寺尾紗穂
シンガー・ソングライター
Saho Terao

個人の小さな物語をすくって

岸政彦（以下、岸）：寺尾さんと石川さん、それぞれの活動がすでに多様性に満ちていますよね。まず寺尾さん。原発労働者を訪ね歩きまとめた証言集、『原発労働者』（2015年）やサイパン、沖縄、八丈島と足を運び、そこで日本の南洋統治時代を知る人たちへの取材を通して書いた『南洋と私』（2015年）など、ノンフィクションをベースにした書き手として活動しながら、同時に曲を作り、歌うことも続けていますが、きっと大抵の人は、これらの活動すべてが同一人物によるものだと、最初は気づかないと思うんです。でもきっと寺尾さんのなかでは、ひとつの矛盾もないんだろうなあと思うのですが、どうですか？

寺尾紗穂（以下、寺尾）：そうですね。私は小さい頃から本を読むことも自分で書くことも、曲を作って歌うことも全部好きでした。書く上では、ずっとエッセイが好きだったので、『南洋と私』については、その発展版のようなイメージで取り組んできたように思います。

岸：『南洋と私』の冒頭は、確か大学時代の恋人と訪ねた屋久島の海岸で水着を忘れるシーンから入るじゃないですか。本題からかけ離れた話から物語ははじまりますが、そうやって実際の取材に至るまでに起きたことを寺尾さんはかなり丁寧に書かれています。その発想、構成は最初から頭にあったんですか？

寺尾：やっぱりエッセイ、というのがまず頭にあるのと同時に、最初の頃は観光を目的に屋久島へ行っていたので、旅行記のような側面もあると思います。

岸：結構複雑な本ですよね。そしてそれを意外なほどに淡々と書き綴られていますが、実はかなり度胸がいる本だと思っているんです。なかなか書けないですよ。また『原発労働者』では実際に原発で働いた方たちに直接取材をしていますよね。このガチで取材をして書くということは、かなり労力がいることだと思うのですが、そこに苦痛は伴わないですか？

寺尾：知りたいという思いの方が強くて、あまり苦痛は伴わないですね。岸さん自身も取材を通して本を書かれていますが、苦痛はありますか？

岸：僕はすごく苦手です。できればやりたくないくらいに。じゃあなぜ今、社会学者として様々な人に取材しているのかというと、その原点は高校生の頃、スタッズ・ターケル（※）の本にすごくはまったことが大きいです。ターケルは、無名の人たちにイ

多様性ってどういうこと？

What's diversity?

ンタビューをした記録を編集せずにそのまま掲載するという本を出しているんですけど、それを読んだ当時の僕は「こんなに面白い本があるんだ。自分もこういう本を書いてみたい」と思ったんです。でもそのためには取材は絶対にはずせないじゃないですか。それで自分なりにいろいろ試行錯誤しながら今に至りますけど、やっぱり基本的にはいつも苦痛です。石川さんもまた様々な地でいろんな人に出会っていますが、苦痛とは思いませんか?

石川直樹（以下、石川）：僕は知らない人に話しかけることは全然苦痛ではないです。子供の頃から人見知りすることもあんまりないんです。僕自身のことをたくさん語ったりするのだけは、ちょっと苦手意識があるくらいで。

岸：僕は石川さんの著書『この地球を受け継ぐ者へ』（2001年）と、写真集『潟と里山』（2015年）を拝見していますが、前者は冒険することへの喜びと若さに満ち溢れた青春物語で、後者は新潟の自然と暮らしの関わりを見つめ直した、すごく内省的な物語だと受け取りました。つまり石川さんは両極端な振り幅を持っていると。そこで気になったのは、これだけ旅を重ねながらいろんな振り幅を持つということは、逆に固定した関係性というか、固定した暮らしみたいなものに対する嫌悪感を持っていたりするのかなあと。

石川：嫌悪感はないです。ただ、僕自身はいつも変幻自在でありたいというか、常に変化をしていたいんです。というと、何か気取ったように聞こえてしまうかもしれないんですけど、要は自分のアイデンティティがあんまりないというか、根無し草の典型だと思っています。僕は東京生まれ、東京育ちですけど、東京がホームだという感覚もないんですね。たとえ長期の旅から東京に戻ってきても「帰ってきた」っていう感覚もなくて。むしろ雨風さえ凌げれば、そこがホームになるというか。だから僕にとって東京のイメージは無色透明です。そんな僕からすると、みんなそれぞれ故郷があるのがすごいなあって思います。例えば沖縄に行ったりすると、個人のアイデンティティがその土地に結構密着しているじゃないですか。そういう場面に出合うと、やっぱりどこかうらやましく思ったりします。岸さんの根っこの部分、アイデンティティは出身地にあったりしますか?

岸：これがまったくないんです。そう、それが関係しているのか、実はこの前人に言われて初めて気づいたことがあって。それは僕が書いた論文や本には中間集団が登場しないっていうことなんですよ。

石川：中間集団というと?

岸：人から「地元や親戚、家族という中間集団が抜けたまま、大きな社会構造のなかでもがいている個人ばかりを書いているね」って言われたんです。僕はそれを受けて確かにそうかもしれないなって思いました。

寺尾：岸さんの『断片的なものの社会学』（2015年）を読みました。ああいった文章を学者の人が書いたっていうことが、まず私のなかではすごく驚きでした。『南洋と私』を出版したときに刊行記念で渋谷にある書店で岸さんのご友人である作家の星野智幸さんと対談させていただいたんですけど、「個人的な物語を見つめていこうという流れが今の時代にはある」っていうようなお話になって、それはとてもいいことだなあって思っていたんです。

岸：そうですね。社会学上、もう一度、ちゃんと社会調査を地味にしようよっていうのはありますね。これは余談ですけど『断片的なものの社会学』このタイトルに至るまで、「社会学」を入れるかどうかというのをすごく悩んだんです。でも今、結果的に入れて良かったと本当に思っています。というのも、意外にもいろんな方から「社会学は嫌いだったけど、この本で考えが変わりました、印象が変わりました」って言われることが多くて。嬉しいですよね。と同時に「俺たち社会学者は嫌われていたんだ」って気づくわけですけど（笑）。

社会学ってなんだろう?

What's sociology?

他者を受け止める器になる

石川：インタビューにおいて面白いなと思うのは、こちらが相手に核心を聞こうとして、結果的に本題ではないところ、例えばちょっとした雑談だったり、その人の仕草や身振りだったりから出てくるささやかなことが、実は本質をついていることがあったりすることなんです。さっき岸さんはインタビューを編集せずにそのまま記録した本が好きだったと言っていましたけれど、もしかするとそういう部分があるのではないかなって。

岸：確かにそうですね。写真だと、それはどうですか? 予期せぬものが何かと写っていた場合とか。

石川：そもそも写真の面白さとは、予期しない何かが写り込むことにあります。偶然を排除した写真は広告写真になっちゃうわけで、僕が撮る写真はむしろ偶然をどんどん取り込んでいく。自分が意識していなかったものが写っていたときにこそ喜びを感じるというか、写真そのものの強みが出るんだと思いますね。

岸：それはわかる気がします。僕自身、社会学をやる上で、現場の人の話を聞くしかないと思って聞きに行っているわけですけど、そこでいろんな人に会えば会うほど予期しない方向にいって自分の意見もどんどん変化していって。で、結果として取材対象に対して僕は一概に言えなくなっていくんです。

石川：一概に言えなくする。それは写真家と同じですね。一方向からしか見られない、例えばメッセージを乗せた写真なんかはつまらない。

岸：言われてみれば、そうかもしれませんね。徹底的に見て聞いて記録したものを変に自分のなかで意味づけしないで、そのまんまを書くというか。例えば夜中に近所を歩いていたら、前から全裸のおっさんとすれ違ったんですよ。怖いじゃないですか。でもよくみたらそのおっさん、洗面器を持っているんですよ。あ、銭湯へ行くのかってね（笑）。全裸で銭湯行くのって、超合理的じゃないですか。そういう社会の断片を書いていく。

一同：（笑）

石川：寺尾さんは、そこはどうですか？ 自分の活動は自分を通じた世界の記録という意識はありますか？

寺尾：書くことも音楽を作ることも歌うこともすべては自分自身の記録という側面はあります。あと最近すごく感じているのが、書くことよりも歌うことのほうが受動的かなって。

この世界を知るため必要な条件とは？

What conditions are necessary to know our world?

岸：受動的とは？

寺尾：受け身でいるんです。というのも自分で作った歌を歌ったときに、急に他者の感情が入ってくることがあって。それには自分でもびっくりしました。確か自分の娘を虐待して殺してしまった母親のニュースを見たあとに歌ったんですけど、それまでは自分のことを書いて歌っていたのに、その時なぜかその母親の気持ちが自分のなかに入り込んできて、気づいたら、歌いながら泣いていたんです。そう、だから「歌は器」と言われたりもしますけど、歌を歌うっていうのは能動的に見えて、実はすごく外にひらかれている、すごく受動的な何かを受け入れる行為でもあるのかなって。今はそう思うようになりました。

岸：音楽は他者にとっての器になると。

寺尾：もちろん、いつも他者の器になるとは限らないんですが、でもライブを観に来てくださるお客さんの気持ちが入り込むことはよくあるんですよね。以前、主催者の方から「今日はダウン症の娘さんを持つお母さんがいらしていて、寺尾さんのあの歌をどうしても聴きたいとおっしゃっているので、ぜひやってください」と言われて。本番で歌っていたら自然と涙がこみ上げてきて、泣くのを我慢しながら歌ったんです。それはきっとその母親の気持ちというものを追体験するというか、自分が歌うことによって、別の角度からその人の気持ちを教えてもらうような経験をしているんです。

石川：寺尾さんの今の話はすごく共感できますね。僕も、僕自身が発信しているというよりも、向こうから飛んでくるものをカメラで受け止めながら、ただシャッターを切っている感じなんです。例えば向こうから弓矢が飛んできたとします。その弓矢を弓矢として僕が認識して撮ったら、それはただの弓矢の写真になってしまう。僕はそんな写真は撮りたくなくて、言葉や意味に置き換わる以前、つまり「何かが飛んできたぞ」というときに撮りたい。だから、自分の主観で世界を意図的に切りとったり、説明的な写真を撮ることにはまったく興味がないんです。それよりも何かこう……、言葉以前の叫びのような、もごもごとしたものをそのまま提出したい。

寺尾：石川さんはこの世界を知りたいっていう、好奇心が先立っているんですね。私自身もそうかもしれません。生きているといろんな問題があってそれに反応はするけれど、そこで悩んで前へ進めなくなるということはあまりなくて。だったらその状況を変えるために自分はどう動けばいいのか？ そこは自分を転換していくことだけ考えます。そのために世界を知って、おかしいところは直すために動いていきたい。

石川：都市に生きる人たちってまず周りの環境を変えたがりますよね。例えば寒かったら暖房、暑かったら冷房っていうように。でも、これがヒマラヤの山中にいたら、冷房も暖房もないから自分が変わっていくしかない。実際、高山に登るときに何が一番大切かって体力よりも順応力なんですよ。つまり薄い酸素のなかでも生きられるように、自分の体を変えていくということ。僕はそれに慣れてしまったんですよね。いろんな旅を通じて。さっき「変幻自在でありたい」と言いましたけど、実際、たとえどんな環境であっても、ちゃんとそこで生きていけるようにしていたいっていう気持ちもそこにはあるんだと思います。

岸：僕は石川さんのようにどこでも寝られるような順応力はないですが（笑）、人の語りを聞き取っているときは、ただその語りに身を任せるようにしています。自分から話を聞くというよりも、その人が語りたいように語ってもらって、それを受け取らせてもらう、ということをしている気がします。

※**スタッズ・ターケル**　1912年NY生まれ。2008年没。ラジオパーソナリティやテレビ番組のホストとして活躍するなかで、後に「口述の歴史（オーラル・ヒストリー）」と呼ばれる独自のインタビュースタイルを確立した。著書『よい戦争』でピューリッツァー賞受賞。

Listen to Small, Personal Stories

Masahiko Kishi: Terao, your work — much like Ishikawa's — spans a diverse range, doesn't it? In addition to your work as a primarily non-fiction writer, such as *Genpatsu rodosha* [Nuclear Power Plant Workers] (2015), a collection of oral testimonies you gathered while visiting nuclear power plant workers, and *Nanyo to watashi* [The South Seas and Me] (2015), based on interviews you conducted in Saipan, Okinawa, and Hachijojima Island with people who remember when Japan governed the South Seas, you also continue to write and sing songs. I'll bet most people don't realize at first that the same person is responsible for all this activity. At the same time, I imagine you probably don't sense any internal contradiction at all.

Saho Terao: That's right. Ever since I was little I enjoyed reading books and writing my own stories and writing and singing songs — all of it. As a writer, I've always been partial to essays so I think I've approached *The South Seas and Me* I've written as extensions of that form.

Kishi: You begin *The South Seas and Me*, if I remember correctly, by describing a visit to Yakushima with your boyfriend during university and how you forgot your bathing suit on the shore. Your tale begins with a story quite far removed from the book's main topic, and then you write in some detail about the events that lead you to the actual interviews. Was this concept, this structure, clear to you right from the outset?

Terao: Well, I suppose first of all I'm conscious of the form of essays. At the same time, when I first went to Yakushima I did so as a tourist, so there's also an element of travelogue.

Kishi: It's a fairly complicated book, isn't it? Although written in a surprisingly dispassionate tone, it must have taken real nerve to put together. It's sure not the sort of thing anybody could write. And then for *Nuclear Power Plant Workers* you personally interviewed people who had worked at nuclear power plants, didn't you? I imagine getting so directly involved must make for a really labor intensive process. Didn't this ever seem a hardship?

Terao: My desire to understand is more powerful, so there's very little by way of hardship. You yourself write books based on interviews; do you suffer through them?

Kishi: They're not my forte. In fact, if I could get away without doing them at all, I would. So why do I interview all sorts of people as a sociologist? One major reason is that I was completely hooked on the work of Studs Terkel* when I was in high school. Terkel's books were built around interviews — unedited, just as they were — with ordinary people. At the time I thought they were just incredibly interesting, the kind of books I wanted to write myself. But first I'd have to do the interviews, right? I've muddled along as best I can by trial and error, but they're always a struggle. Ishikawa, you also encounter all kinds of people in your travels. Do you ever find that hard to deal with?

Naoki Ishikawa: I don't have any problem going up to talk with people I don't know. Ever since I was a kid I've never been particularly shy around strangers. I suppose I do find it hard to talk a lot about myself, though.

Kishi: Ishikawa, I've had a chance to read your book *Kono hoshi wo uketsugu mono e* [To Those Who Will Inherit the Earth] (2001) and your photo collection *KATA and SATOYAMA* [Lagoons and Local Woodlands] (2015). The former is a kind of coming-of-age tale overflowing with the energy of youth and a delight in adventure, while the latter reconsiders the relationship between nature and way of life in Niigata, something I took as a deeply introspective tale. In other words, you're able to swing to both extremes. What concerned me a bit, though, was — given your extensive travels and considerable versatility — whether you might feel a sense of antipathy toward fixed relationships, toward settled lifestyles?

Ishikawa: No antipathy at all. But, for my part I want to stay adaptable, always changing. What I mean is, and I know this may sound a bit affected, I don't have much of an identity myself — I think I'm more of a typical drifter. I was born and raised in Tokyo, but the city doesn't feel like home at all. When I come back to Tokyo after a long trip, for example, it doesn't

feel like a coming home. Really, home is wherever I can find shelter from the wind and the rain. So the image I have of Tokyo is colorless and transparent. So I'm always amazed at how everyone else seems to have a hometown. If you go to Okinawa, for example, you can tell how closely people's identity as individuals is tied to the land, can't you? I suppose I'm a bit envious in situations like that. Kishi, do you find your core identity tied up where you're from?

Kishi: Not at all. Maybe this has something to do with something I realized for the first time when someone pointed it out the other day: that intermediate groups never appear in my papers and books.

Ishikawa: Intermediate groups?

Kishi: Somebody said, "You write about individuals struggling within overarching social structures, without addressing intermediate groups such as local community, extended relations, or family." I have to admit this struck me as an apt observation.

Terao: Kishi, I read your book *Danpenteki na mono no shakaigaku* [The Sociology of Fragmentary Things] (2015) and was really surprised that an academic could write like that. At a launch event for *The South Seas and Me*, held at a bookshop in Shibuya, I did a talk show with a friend of yours, the writer Tomoyuki Hoshino. He talked about how we needed to look closely at personal stories, that *this* was the tide of the times, something that struck me as a really good thing.

Kishi: Right. From a sociological perspective, there is this notion that we need to get back to doing the unglamorous work of social research. By the way, for *The Sociology of Fragmentary Things* I really worried a lot about whether to include "sociology" in the title. I think it was the right decision in the end, though, because so many people have told me that they used to hate sociology but the book changed their minds. I'm really happy about that. At the same time, of course, it's also a reminder that we sociologists are a hated bunch. (laughs)

Have the Capacity to Accept Others

Ishikawa: What I find interesting about interviews is how, when I'm trying to get at somebody's core issue, in the end the essential bits are often revealed not so much by what we talk about but by something trivial mentioned in passing, or some gesture, or the way the other person holds themselves. Kishi, you said that you liked books of interviews just as they are, without editing, and I wonder if that might be the reason.

Kishi: I think you might be right. What's the analogue with photography? Finding something in a shot that you didn't expect?

Ishikawa: Well, finding that something unexpected has crept into a shot is the most interesting thing about photography. Photographs that leave nothing to chance are just advertising; with my photography I aim to incorporate as much serendipity as I possibly can. I'm really happy when I find I've captured something I wasn't conscious of at all, and I think the photographs themselves are stronger for it.

Kishi: I think I know what you're talking about. As a sociologist I go to talk to people on the ground because that's the only way to get certain kinds of information, and then when I do, I meet all sorts of people and learn all sorts of things that take my research in unexpected directions and change my thinking completely. In the end, I find I just can't wrap things up neatly at all.

Ishikawa: Not being able to wrap things up neatly — it's the same with photographers. Photographs that can only be seen from one angle — like those that are really message-heavy — are just boring.

Kishi: You know, you might be right. Like, rather than trying to ascribe some meaning to things that you've thoroughly observed and listed to and recorded, maybe better to write about them just as they are. For example, I was out walking in the neighborhood one night and this older fellow came walking toward me completely naked. Scary, huh? I looked a little closer, though, saw he was carrying a washbasin, and figured maybe he was going to the public bath. (laughs) There's something perfectly rational about going to the public bath naked, right? These are the kinds of fragments of society that I write about. (Everyone laughs)

Ishikawa: Terao, what do you think? Are you conscious of your work as a record of the world as seen through yourself?

Terao: There's an aspect of writing words and making music and singing songs — all of it — as a record of myself. Also, one of the things I've really realized lately is that singing may be more passive than writing.

Kishi: What do you mean by "passive"?

Terao: More impressionable. What I mean is, one time when I was singing a song I'd written myself in front of other people I found I was overcome by the emotions of others, something that really surprised me. I was singing right after I had heard news about a woman who had abused and killed her own daughter, but even though the song was one I'd written about myself and always sung that way, for some reason I was overcome by the mother's feelings and before I knew it I was crying as I sang. I guess this is why they say "a song is a vessel." Even though singing seems so active, it's actually really open to outside influence, suggestion, and impressions. This is how things seem to me lately.

Kishi: Music as a vessel, then, for other people.

Terao: It isn't always a vessel for others, of course, but I often find myself influenced by the mood of people in the audience when I'm singing live. One time the organizers asked me sing a certain song, saying that there was a woman in the audience who had a daughter with Down's syndrome and really wanted to hear it. When I sang that song during the show the tears started to well up on their own and I had to struggle to keep from crying. I think this was because I was experiencing that mother's feelings for myself, or maybe it's that through singing I was learning about someone's feelings from a different angle.

Ishikawa: I can really relate to what you just said, Terao. With my photography I don't so much feel like I'm conveying something myself as clicking the shutter and using the camera to catch what comes flying in. Let's say an arrow was to come flying in from somewhere. If I'm able to process the arrow as an arrow, then all I get is a photo of an arrow. I don't want to take photographs like that, and instead try to capture those moments before words or meaning, when you're only aware of "Incoming!" So I'm not at all interested in deliberately clipping out a subjective view of the world or shooting explanatory photographs. I'd much rather, I don't know, capture something less distinct, like a pre-verbal yell, just as it actually is.

Terao: What comes first for you, then, is your curiosity, your desire to learn about the world, right? I think it might be the same with me. Living means facing all sorts of problems, which I respond to but rarely end up worrying about so much that they keep me from moving forward. I just have to think about what I can do to change the situation, to think about how I can change myself. To do this I try to learn about the world and hope to change what I can for the better.

Ishikawa: People who live in cities always seem to want to change their surroundings. They want heat when it's cold and air conditioning when it's warm. When you're up among the Himalayas, though, neither of these are available so you have to change yourself. The most important thing when climbing in the mountains isn't actually stamina so much as adaptability. You have to change your body to survive in a low-oxygen environment. I've gotten used to it in the course of my travels. I said earlier that I wanted to always be changing, and what I meant was that I wanted to be able to find a way to live in any kind of environment.

Kishi: I don't have your adaptability, Ishikawa — your ability to sleep anywhere (laughs) — but when I listen to people I try to give myself over completely to the act of listening. Rather than probing or trying to tease out answers, I feel like I try to listen and take in, from a position of humility, what they want to talk about.

***Studs Terkel** Born in 1912 in New York. Died in 2008. Through his work in radio and television he developed an original style of reportage based on oral histories. He received the Pulitzer Prize for his book *The Good War*.

岸政彦　Masahiko Kishi

1967年生まれ、大阪在住。社会学者。大阪市立大学大学院文学研究科単位取得退学。博士（文学）。龍谷大学社会学部教員。研究テーマは沖縄、被差別部落、生活史。著書に『同化と他者化―戦後沖縄の本土就職者たち』（ナカニシヤ出版）『街の人生』（勁草書房）『断片的なものの社会学』（朝日出版社）など。

Born in 1967 living in Osaka. Kishi is a sociologist. Completed all coursework of the Osaka City University Graduate School of Literature and Human Sciences. Ph.D. Associate Professor in the Faculty of Sociology at Ryukoku University. Research interests include Okinawa, discriminated communities, and life histories. Books include *Doka to tashaka: sengo Okinawa no hondo shushokusha tachi* [Assimilation and Otherization: Post-War Okinawan Migrants in Mainland Japan] (Nakanishiya Publishing), *Machi no jinsei* [The Lives of Cities] (Keiso Shobo), and *Danpenteki na mono no shakaigaku* [The Sociology of Fragmentary Things] (Asahi Press).

石川直樹　Naoki Ishikawa

1977年東京生まれ。写真家。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。人類学、民俗学などの領域に関心を持ち、辺境から都市まであらゆる場所を旅しながら、作品を発表し続けている。著書に『最後の冒険家』（集英社）ほか、多数。最新刊に写真集『国東半島』『髪』『潟と里山』（青土社）がある。

Born in 1977 in Tokyo. Ishikawa is a photographer. Completed the second stage of the doctoral program at the Tokyo University of the Arts Graduate School of Fine Arts. Interested in fields such as anthropology and ethnology, he has continued to produce work while traveling from cities to the hinterlands and all points in between. Books include *Saigo no bokenka* [The Last Adventurer] (Shueisha). His most recent publications are the photography collections *Kunisaki Peninsula*, *Hair*, and *KATA and SATOYAMA* (all from Seidosha).

寺尾紗穂　Saho Terao

1981年東京生まれ。シンガー・ソングライター。2007年アルバム『御身 onmi』でメジャー・デビュー。ピアノ弾き語りによるライブやCMソング、企画アルバムのほか、エッセイストとしても活躍。近刊に『南洋と私』（リトルモア）『原発労働者』（講談社現代新書）など。今年3月には最新アルバム『楕円の夢』をリリース。

Born in 1981 in Tokyo. Terao is a singer-songwriter. Her major-label debut came with the 2007 album *Onmi*. In addition to accompanying herself on piano in songs for live performances, commercials, and albums, she is also active as an essayist. Her recent publications are *Nanyo to watashi* [The South Seas and Me] (Little More) and *Genpatsu rodosha* [Nuclear Power Plant Workers] (Kodansha Gendai Shinsho). Her latest album, *Daen no yume* [Dream of the Ellipse], was released this March.

私たちは今日を、この街で生きている。生まれも育ちもこの街の人。漂流のごとく気づけばこの街に行き着いた人。運命の出会いをきっかけに、この街に居場所を見つけた人。絶えず更新され続ける都市の営み、止まることのない時間のなかで、私たちもまた不確かな命の単位のもと、変化を繰り返しながらこの街を生きてきた。

思えば遠くまで来たように思う。路地裏から目抜き通りまで、道という道を歩き、ときに立ち止まり、迷いながらも、私たちはこの街のなかに自分の日常を見出してきた。その繰り返しのなかで心に芽生えた日常の手触りは、ときに自分自身の輪郭をくっきりと浮かび上がらせることがある。

私を育んだ、この街の断片。それはとてもささやかで、でも特別な、私だけの、東京物語。6人が捉えた日常のひとひらを、6ページにわたって垣間見ます。

We live today, here in this city. People who were born and bred in this city. People who ended up here unintentionally, like drifters. People who found their place here through a chance encounter. Within the workings of a city that constantly renews itself and within time that never stops, we with our uncertain units of life have also changed repeatedly during our lives in this city.

If you think about it, we've come a long way. From the back alleys to the main streets, we've walked the streets that constitute our way in life. While stopping to pause now and then, and also losing our way, we have found our normality here in this city. Within this cycle, the sense of the everyday that has taken root in our souls can sometimes bring our own lineaments into sharp focus.

These fragments of the city that raised me may be slight, but they make up my own, special Tokyo story. Over six pages, we get a glimpse of snippets of the everyday for six different people.

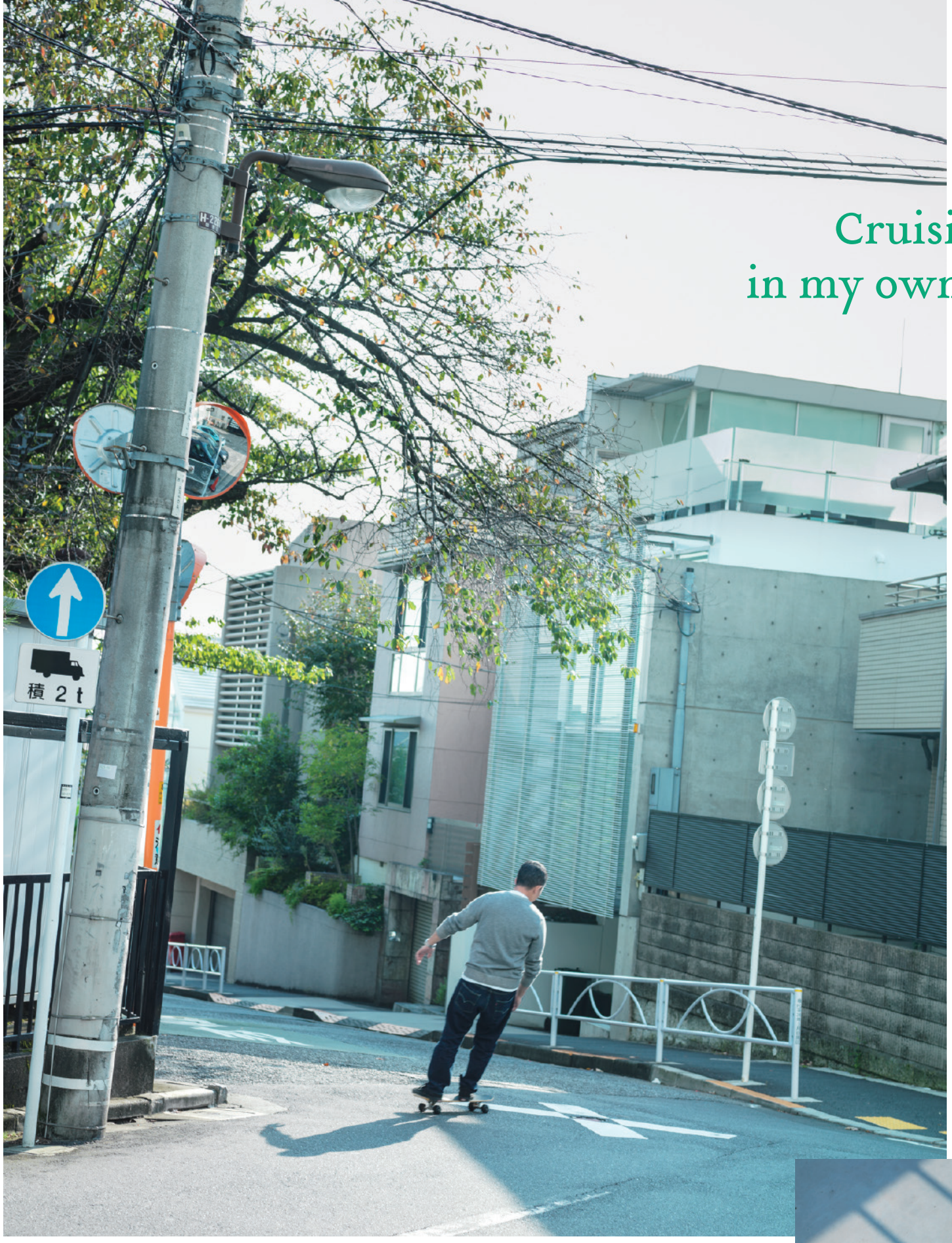
研究テーマ⑪

東京、この街の手触りを探して

Tokyo: in search of the feel of the city

車輪の上の個室から、街を流す

Cruising the streets, in my own private room on wheels



生まれは新宿。幼い頃は恵比寿や代官山界隈で育ち、21歳からはロサンゼルスへ。5年後に帰国し、以来ずっと代々木上原に住んでいます。そんな僕にとって東京の居場所というと、今も親しい幼馴染みと経験したことの蓄積が、そのまま自分の居場所になっている気がします。

彼らと自転車やスケートボードに乗り出したのは、小・中学生の頃。目黒川から段丘上に土地がせりあがった台地の尾根には、旧山手通り。僕はその旧山手通り界隈を自転車やスケートボードで流すのが本当に好きでした。西郷山公園の段丘も、スケートボードをやるには本当に最適な坂で、よくお世話になったなあ……。と、思い返してみると、自分が遊んでいた場所はすべて同じ段丘沿い。段丘を利用しながら街を流していく感覚は、僕と東京との距離感をすごく表していると思います。今もよく渋谷界隈をスケートボードや車で通りますが、どれだけ通っても、街に点在する店のことは全然詳しくならないんです。せいぜい立ち寄るのは東急ハンズと電気屋ぐらい。とにかくひとつの場所にとどまらず、常に街を客観的に見てしまいます。

僕にとってスケートボードや自転車、車という乗り物は、東京を客観的に見るためのツールなんでしょうね。人で溢れた渋谷のど真ん中に居ても、車輪の上に乗ってハイスピードで街を駆け抜ければ人と接することもなく、その空間は個室になる。その個室から街をただ眺めること。街の中心や輪の中には決して入らず街を流していくこと。その感覚が僕は好きだし、客観的に観察することが編集者という今の仕事にも繋がっているのかもしれません。

I was born in Shinjuku. When I was a child I was brought up in the Ebisu and Daikanyama areas, and went to Los Angeles when I was 21. Five years later I came back to Japan, and I've lived in Yoyogi Uehara ever since. If one were to speak of the place where I belong in Tokyo, then the accumulation of experiences I had with childhood friends I'm still close to will always be my place in the world, I think.

It was during elementary and junior high school that I began riding bicycles and skateboards with them. The Kyu-Yamate-dori street is on the ridge of a plateau where the land gradually rises to a high terrace from Meguro River. I used to really enjoy riding around the Kyu-Yamate-dori street area on my bicycle or skateboard. And the slope of Saigoyama Park were the absolute best for skateboarding. I am really grateful for that… Actually looking back, all the places where I played were along terraced hills.

I think the sense of cruising around the town using its terraced hills very much expresses the sense of distance between me and Tokyo. I still often pass through the Shibuya area on my skateboard or in my car, but no matter how many times I do so, I never get to know the shops dotted around the streets. At most I only stop by Tokyu Hands and electronic stores. At any rate I always end up looking objectively at the town, not just at one place.

For me, forms of transport like skateboards, bicycles and cars are tools for looking objectively at Tokyo. Even when I'm smack bang in the middle of Shibuya overflowing with people, when I ride through the streets on wheels at high speed there's no human interaction, and that space becomes my own private room. I simply view the streets from my own room. I course around the streets without ever going into the town center or the circle around it. That's a feeling I like, and observing things objectively could be connected to my current job as editor.

竹村卓　Taku Takemura

1973年生まれ。編集者。数々のカルチャー誌で執筆、広告制作に携わる。著書に『ア・ウェイ・オブ・ライフ 28人のクリエイタージャーナル』（ブルース・インターアクションズ刊）がある。

Born in 1973. Editor. He frequently writes for cultural magazines, and works in advertising production. Written works include the book *A Way of Life – Creator Journal of 28 Artists* (blues interactions, inc.).

今とノスタルジーが交錯する目黒川沿い

Along the Meguro River, a blend of the present and nostalgia

私はニューヨークで生まれてすぐに東京へ引っ越し、ほぼ東京で育ちました。様々な国と比較して、東京の顔といえば「バランスがいいところ」でしょうか。文化、歴史、テクノロジー、安全性、ショッピング、食…。東京好きの海外の友人たちも「いろいろな側面を楽しむことができる街」と言っていて、彼らの目線を通してこの街の素晴らしさを改めて感じることも多いです。

東京都、というと広いですが、私にとっては育った中目黒・代々木上原というふたつの街がホーム。特に中目黒は、幼稚園から小学校までを過ごした思い出の場所です。今も「mother」「DEPT TOKYO」というふたつのショップを構えているため、頻繁に訪れています。

ショップの建つ目黒川沿いは、小学校時代の通学路でもありました。その頃は雨が多く降るとすぐに川が氾濫し、道が水没していたので、長靴ギリギリのところまで水が溢れている場所を歩くのが楽しかった思い出があります。

ある日、川沿いにある工場の前で転んでしまったときのこと。膝を擦りむき、血を流してしまった私の元にすぐさま駆けつけ、膝に優しく絆創膏を貼ってくれたのが、工場のお兄さんでした。その工場は今でもあるため、前を通る度に懐かしく思い出します。幼い頃から様々な国を旅してきた私ですが、そんな思い出も含めて、やはり自分の街が一番だと感じるのです。

I was born in New York but moved straight to Tokyo, so I was mostly brought up in Tokyo. You could sum up the face of Tokyo as a well-balanced place compared to various countries in terms of its culture, history, technology, safety, shopping, eating.... Friends from overseas who love Tokyo say it's a city you can enjoy various sides of. Through their eyes I often feel afresh how great this city is.

Metropolitan Tokyo is vast, but for me, home is the two areas I grew up in, Naka-meguro and Yoyogi Uehara. I have fond memories of Naka-meguro in particular, where I spent the time from kindergarten to elementary school. I still go there a lot because my two shops "mother" and "DEPT TOKYO" are there.

Along Meguro River where my shops are is also the route I walked to elementary school. Back then when it rained a lot, the river used to overflow very quickly, and I remember what fun it was to walk through parts where the water almost came over the top of my rubber boots because the path was under water.

One day, I fell over in front of a riverside factory. It was a guy from the factory who rushed over to me, my knees grazed and bleeding, and gently put an adhesive plaster on my knees. That factory is still there, so when I walk past it I remember that day with nostalgia.

From an early age I've traveled to various countries, but memories like that are partly why I still feel my own city is the best.

eri

1983年NY生まれ、東京育ち。デザイナー。「chico」、「mother」、「FIG femme」を立ち上げ、2015年、中目黒「mother」の1Fに「DEPT TOKYO」を再オープンさせた。

Born in 1983 in New York and raised in Tokyo. Designer. Launched "chico", "mother" and "FIG femme", and in 2015 reopened "DEPT TOKYO" on the first floor of "mother" in Naka-meguro.

偶然の出合いを求めて今日も図書館へ

Off to the library again today, in search of a chance encounter

1993年に早稲田大学へ留学し、居を構えたのが目白にある和敬塾という学生寮。ルーツも所属大学も違う約300名もの学生が一堂に会し、共鳴し合うところに東京らしい面白さを感じました。今僕がエグゼクティブ・プロデューサーを務めるイベントスペース『SuperDeluxe』も「まだ見ぬ人やモノ、ジャンルと出合いたい」という理由から始まったもので、和敬塾のような場所とリンクしていたなあと、今になって思います。

就職してからはジャズバーやクラブ、ライブハウスに足しげく通い、新しいイベントのフライヤーをもらっては出かけていく日々。東京ではライブ、映画、演劇、ダンス……と、毎日どこかで何かが行われています。東京独自の文化もありつつ、世界のカルチャーともクロスしているところが魅力で、僕はずっとこの街に住んでいます。

『SuperDeluxe』では意外な人同士を共演させたり、アーティストの欲求に任せて表現してもらったりと、実験的なイベントも行っています。なぜならそこから生まれる化学反応を楽しみたいという思いがあるから。だからこそ今も日々多くの人に会いますし、インプットも欠かせません。そういう意味で僕にとって大切な場所が、家の近所にある日比谷図書文化館。豊富なコレクションから様々な本を楽しむことができます。また過去に落語、クラシック、ジャズなどのCDレンタルが可能な時代はよく借りて聴いていました。インターネットで検索しても出てくるのは自分の意識上での関連情報ばかり。でも日比谷図書文化館は思いもよらない偶然の出合いに溢れている。その出合いが楽しく、僕のインスピレーションの源にもなっています。

In 1993 I came to Waseda University as an exchange student, and took up residence in a student dormitory called Wakeijuku in Mejiro. I found it a very interesting and Tokyo-like thing that over 300 different students with different roots and belonging to different universities all came together, and related to each other. We began SuperDeluxe, the event space where I now work as executive producer, with a desire to encounter new people and new forms of expression. Perhaps this outlook germinated at places like Wakeijuku.

After I started working, I used to frequent jazz bars, clubs and live music venues, picking up flyers for new events and going out every day. There is always something going on somewhere in Tokyo — live music, movies, theater, dance...I am fascinated by the way Tokyo retains its own peculiar culture while also running parallel with global culture. I've always lived in this town.

At SuperDeluxe we also hold experimental events that bring together artists from different genres, or let artists express themselves in new ways. I've always enjoyed the chemical reaction created by these encounters. I'm fortunate to meet lots of people on a daily basis, and their input is indispensable. On the other hand, another important place for me is the Hibiya Library & Museum close to my apartment. I can enjoy a variety of books from their rich collection. And back in the days when CD rental was possible, I often used to borrow and listen to CDs of rakugo, classical music, jazz etc. The internet is a wonderful resource, but information is mostly related to what I was looking for already. Libraries still hold the opportunity for chance encounters. I enjoy those encounters, and they are a source of inspiration.

約18万冊の蔵書と、約300の閲覧席を持つ、千代田区立日比谷図書文化館・図書フロア。並行して文化館では、「日比谷カレッジ」と題し、様々な学びと共有の場の提供を目的に、定期的に講座、セミナー、ワークショップなどを展開。http://hibiyal.jp/

The library floors of the Hibiya Library & Museum in Chiyoda City hold a collection of approximately 180,000 books and have a reading area capacity of around 300 seats. Alongside this on the Museum side, the "Hibiya College" program offers regular courses, seminars and workshops aimed at providing a shared place for study of various kinds.

マイク・クベック　Mike Kubeck

1971年カリフォルニア生まれ。イベントスペース『SuperDeluxe』エグゼクティブ・プロデューサー。1998年より『DELUXE』で即興音楽の定期イベントを始め、2002年に『SuperDeluxe』を立ち上げる。

Born in 1971 in California. Executive producer of an event space, SuperDeluxe. From 1998 he began regular improvised music events at DELUXE, and in 2002 launched SuperDeluxe.

雑多なままでいられる場所

きっかけは5年ほど前、東京でLGBT（※）のパレードを見たときのこと。物々しい雰囲気を想像していましたが、参加者たちの様子は意外とばらばらだったんです。法的権利を求めて声を上げる人もいれば、ビールを飲みながらダラダラ歩いたり、パーティー気分ではしゃぐ人もいる。いろんな考えの人がまったく異なる振る舞いをしていて、でも同じ場所にいることを認め合っているんですよね。そのとき、自分がそういう場に居心地の良さを感じることに気づいたんです。

僕はシェアハウスに住んでいたのですが、その環境を選んだのも同じ理由でした。自室にいても、壁が薄いから誰かの生活音が聞こえるんです。共同生活には不自由さもありますが、それでも、隔絶することなく人とつながっていたい。僕が通っているコミュニティカフェ「芝の家」にも似たような安心感があります。

僕は小学生のときから、みんなと同じことをやるように強制されるのに居心地の悪さがありました。その中で、小さい頃からピアノ、吹奏楽やオーケストラ、バンド、路上ライブなど様々な形で音楽をやってきたのですが、個々が奏でるばらばらな音が合わさっているように感じられる場がしっくりくるようになりました。

現在取り組んでいる「東京迂回路研究」の活動で福祉施設を訪問するときも、音楽のセッションみたいだなと思うことがあるんです。あちこちでいろんなことが起こっているけれど、まとまっている。「みんなと同じ」は苦手、だけど人が好き。幼い頃の感覚が、いまの活動につながっているのかもしれません。

It all started 5 years ago, when I saw the LGBT* parade in Tokyo. I had imagined a solemn atmosphere, but people were behaving in surprisingly different ways. Some raised their voices in the demand for legal rights, while some dawdled and drank beer, and some larked around in a party mood. People with various ways of thinking were behaving completely differently, but nevertheless they recognized that they were in the same place. I noticed then that I felt comfortable in that sort of situation.

I shared a house, and I chose that environment for the same reason. Even in your own room, you can hear people's everyday noises because the walls are so thin. There are some inconveniences with communal living, but even so, I want to be connected to people and not feel isolated. There's a similar sense of security at the community cafe I go to called Shiba-no-ie.

From the time I was an elementary student, I sometimes felt uncomfortable being forced to do the same thing as everyone else. That's partly why although since childhood I'd played music in various forms such as piano, brass band and orchestra, bands, street performances etc., I came to feel more at home when I had a sense of the separate sounds of individual performances being combined.

When I visit welfare facilities as part of my current work with Tokyo Diversion Research, I sometimes feel they resemble a musical session. Various things may be going on here and there, but it all hangs together. I dislike "the same thing as everyone," but I like people. The feeling from my childhood could be connected to what I do now.

※LGBT…女性同性愛者（レズビアン）、男性同性愛者（ゲイ）、両性愛者（バイセクシュアル）、性別越境者（トランスジェンダー、性同一性障害など）を含む、性のあり方が多数派とは異なる面がある人々の総称。

*LGBT is the general term for people whose sexuality differs from that of the majority, including lesbian, gay, bisexual, transgender and those with Gender Identity Disorder.

長津結一郎 Yuichiro Nagatsu

1985年生まれ。NPO法人多様性と境界に関する対話と表現の研究所代表理事。医療・福祉分野を中心として、異なる背景がある人々の表現を通じた協働について研究・実践の双方からアプローチしている。

Born in 1985. Representative Director of NPO Research Lab for dialogues and expressions of diversity and divisions. Focusing mainly on medical and welfare fields, the approach is both research-driven and practical with regards to cooperation through expression by people of different backgrounds.

東京迂回路研究とは、社会における人々の「多様性」と「境界」に関する諸問題に対し、調査・研究・対話を通じて、"生き抜くための技法"としての「迂回路」の研究を行うプロジェクト。東京都とアーツカウンシル東京とともに、東京アートポイント計画事業の一環として実施している。www.diver-sion.org

Tokyo Diversion Research is a project examining diversion as a survival technique through surveys, research and dialogue focused on questions of diversity and division among people in society. It operates as part of the Tokyo Artpoint Project, implemented by Tokyo Metropolitan Government and Arts Council Tokyo.

A place where all sorts can coexist

長津さんが運営するNPOの事務所の近所にある「芝の家」（www.shibanoie.net）は、子供からお年寄りまで幅広い人が集うコミュニティカフェ。カフェといっても、楽器を弾いたり、おしゃべりを楽しんだりと過ごし方は自由。

Shiba-no-ie in the neighborhood of the NPO run by Nagatsu is a community cafe that attracts a broad range of people from children to the elderly. Despite being called a cafe, visitors can do as they please, whether that means playing instruments or enjoying a chat, etc.

目黒不動尊の銀杏の黄、秋晴れの青

The yellow of gingko, the blue of autumn skies at Meguro Fudo temple

7年ぶりに撮った新作映画『恋人たち』は3人の主人公が存在し、舞台はすべて東京近郊です。その舞台のひとつが、東京の川と下町。主人公のひとり、アツシは、愛する妻を通り魔殺人事件で失った暗い過去を持つ男で、ノックオンの響きで破損場所を探し当てる橋梁点検の仕事をしています。その舞台を探すべくロケハンでは船に乗って東京の街を一段下から眺めたのですが、そこから見える景色は……、孤独でした。なぜなら都会のビル群が見えて車の音も聞こえるのに、人がまったく見えないからです。「ああ、東京ってこんな街だった」と思うとともに、アツシのように傷ついた男には、こんな群衆の中の孤独が似合うと感じました。

僕は上京後に北千住に住み、その後目黒へ移り住んでもう20年になります。目黒に住み始めて7〜8年頃に撮ったのが『ハッシュ!』という映画。評価もいただき、周りからは順風満帆に見えたかもしれません。けれどほどなくして、僕は鬱になってしまうんです。それも明確な理由もわからずに。以来、誰にも会わず、ひたすらジムで体を動かしてごはんを食べて眠る。その繰り返しで、本当に苦しい毎日でした。

それから1年近く経ち、目黒不動尊の前でバスを待っていた時のこと。鬱になると見るものすべてがグレーに映ることがあるんですが、そのとき不動尊の境内の大きな銀杏の木をふと見上げたら、黄色の葉と秋晴れの青が目に飛び込んできたんです。「なんて美しいコントラストだろう」。……色彩が蘇ったんですね。と同時に直感的に「鬱が抜けた」と思いました。今もあのときのことは鮮明に覚えています。だからこそ僕はあの銀杏の木を、今でもずっと、再生の象徴のように思っています。

Three Stories of Love, my first new film for seven years, has three main characters and is set entirely in Tokyo. One of those settings is Tokyo's rivers and Shitamachi. One of the protagonists Atsushi is a man with a dark past, who lost his beloved wife in a random murder and does bridge damage inspection for a job. His ear detects damages through the concrete when he knocks it with a hammer. In order to scout for a location I got a boat to view Tokyo from a lower position. But the scene I saw from there was one of loneliness. This is because although I could see the cluster of city buildings and hear the sound of cars, I couldn't see any people at all. As I reflected on this aspect of Tokyo, I thought how such loneliness in the middle of a crowd would suit a wounded man like Atsushi.

After I came to Tokyo I lived in Kita-Senju, and after that I moved to Meguro where I've been for 20 years. After about seven or eight years living in Meguro I made the film *Hush!* It was well-received, and people around probably thought all was plain sailing for me. But shortly after that I fell into depression, and what's more I didn't know the precise cause of it. After that, I didn't see anybody, and all I did was work out at the gym, eat and sleep. Every painful day was a repetition of that.

About one year later, I was waiting for a bus in front of Meguro Fudo temple. With depression, sometimes everything you look at seems gray, but at that time I happened to look up at a large gingko tree in the Fudo temple grounds, and the yellow of the leaves and the blue of the autumn sky jumped out at me. I thought how beautiful the contrast was. The world had regained its color for me. At the same time I had this thought, I intuitively felt my depression had lifted. Even now I remember that moment vividly. And that is precisely why I will always think of that gingko tree as a symbol of regeneration.

橋口亮輔　Ryosuke Hashiguchi

1962年長崎生まれ。映画監督、脚本家。『ハッシュ!』『ぐるりのこと。』などでは数々の映画賞を受賞。現在5作目となる長編新作『恋人たち』が全国公開中。http://koibitotachi.com

Born in 1962 in Nagasaki. Film director and screenwriter. He has won numerous film awards for works such as *Hush!* and *All Around Us*. His fifth work, new feature-length movie *Three Stories of Love*, is currently showing nationwide.

山手線は、東京の時計である

The Yamanote Line is Tokyo's timepiece

海外に長期滞在して久しぶりに東京に戻ると、街にうまく馴染めない自分に気づきます。東京は、時間が鋭くて何もかもペースが速い。この都市のリズムに、心も体もついていけないような気分になるんです。

そんなとき、僕が必ずしていることがあります。それは、山手線に乗ってぐるりと1周すること。車内ではちょっと眠ったり、本を読んだり。車窓から外を眺めると、それぞれの街の表情がひと繋がりになって見え、東京という都市像が次第に立ち上ってくる。そうやって山手線に身をまかせていると、自分の中にだんだん東京のリズムが戻ってきます。この都市のリアルな感覚を取り戻すきっかけになっているんです。

僕にとって山手線は、東京を象徴するもののひとつ。早朝から深夜まで規則正しく走っているし、1周は約1時間。街と街を繋いでできた線路の「丸」は、時計のかたちともリンクします。山手線は、東京の時計なのかもしれません。このイメージはきっと、東京に暮らす人なら一瞬にして共有できるのではないでしょうか。

僕は劇場という固定された場を離れ、東京の街を舞台に見立てたプロジェクトを手掛けています。それは、観客に都市のパラレルな一面を感じてもらうための仕掛け。普段、日常生活を営むごく身近なフィールドであっても、新たな物語に触れることで、ものごとに対する見方が変わり、世界観が広がるような感覚を体験できるのではないでしょうか。そのためのきっかけやルートを作ることは、僕のすべての仕事に共通しているのです。

When I spend a long period overseas and return to Tokyo after a long absence, I notice I have trouble fitting in to the city. In time-sensitive Tokyo, anything and everything is fast-paced. I feel like I cannot keep up with the rhythm of this city either emotionally or physically.

At times like these, there is something I always do. I get on the Yamanote Line and do a complete loop. While I'm on the train I sleep a bit, read a book. When I look out of the carriage window, the look of each district seems to merge into one, and an image of Tokyo as a city gradually arises. When I give myself up to the Yamanote Line in that way, the rhythm of Tokyo gradually comes back inside me. It acts as a trigger to regaining a real sense of the city.

The Yamanote Line is one of the things that symbolizes Tokyo for me. From the early morning to late at night it runs with regularity, and one loop of the line takes about an hour. The circular shape of the tracks connecting each district also links to the shape of a clock face. Perhaps the Yamanote Line is the timepiece of Tokyo. This image is one I bet anyone living in Tokyo can instantly share.

Away from the fixed space of the theater, I'm involved in projects that turns the streets of Tokyo into a sort of stage. They act as devices for enabling the audience to experience a parallel side of Tokyo. I think even when it's something or somewhere extremely familiar in daily life, being exposed to a new story changes the way you see things, and you can experience the sense of an expanding world view. Creating the opportunities and the routes to enable this is something common to all my work.

高山明　Akira Takayama

1969年生まれ。2002年、Port Bを結成し、既存の演劇の枠を超えた作品群を発表。2013年、一般社団法人Port観光リサーチセンターを設立し、iPhone向けアプリ「東京ヘテロトピア」をリリース。

Born in 1969. In 2002 he formed Port B and presented a number of works that went beyond the bounds of conventional theater. In 2013 he founded the association Port Tourism Research Center, and released iPhone app *Tokyo Heterotopia*.

アツカン通信

ARTS COUNCIL TOKYO NEWSLETTER

PICK UP 1

角銅真実《十日町合唱団》撮影：冨田了平
Manami Kakudo *Tokamachi Choir* Photo: Ryohei Tomita

TURNフェス
TURN Fes

異なる背景をもった人々が関わり合い、様々な出会いと表現を生み出すアートプログラム、「TURN（ターン）」。2020年東京オリンピック・パラリンピックの文化プログラムに向けた東京都の「リーディング・プロジェクト」のひとつです。監修を務めるのは、アーティストである日比野克彦。「TURNフェス」では、アーティストと福祉施設やコミュニティとの交流を通して生まれた表現を発表する参加型展覧会や、カンファレンスを開催します。多様な人たちがアートを通して交流することで、「ひとがはじめからもっている力」の気づきと発信につなげます。

TURN, an art program that will bring people of different backgrounds together to generate a variety of uniquely individual encounters and artistic expressions, is one of the Tokyo Metropolitan Government's "Leading Project" that will serve as the lead-in to the "Cultural Programme" of the 2020 Olympic and Paralympic Games in Tokyo. Spearheaded by General Supervisor Katsuhiko Hibino, the TURN Fes will include a conference and a participatory exhibition featuring works created through the interactions between artists and residents of welfare facilities and between artists and communities. By sparking exchange among a diverse mix of individuals through the medium of art, the TURN Fes will lead to insights into and messages on the "innate strength that each of us has."

日時／平成28（2016）年3月4日（金）～6日（日）※詳細な時間・内容は決定次第、公式ウェブサイトで発表します。
会場／東京都美術館　**URL**／www.artscouncil-tokyo.jp/ja/events/8427

Date/Time: 3.4 (Fri) – 3.6 (Sun), 2016 (More informations on times, and project details will be posted on the official website.)
Venue: Tokyo Metropolitan Art Museum **URL:** www.artscouncil-tokyo.jp/en/events/8427

INTERVIEW

日比野克彦
Katsuhiko Hibino

「TURN」監修　General Supervisor of TURN

岐阜県美術館 館長、東京藝術大学先端芸術表現科教授、アーティスト。1958年岐阜生まれ。東京藝術大学大学院修了。80年代に領域横断的、時代を映す作風で注目される。作品制作のほか、身体を媒体に表現し、自己の可能性を追求し続ける。各地域の参加者と共同制作を行い社会で芸術が機能する仕組みを創出する。

Born in 1958 in Gifu. Artist Katsuhiko Hibino is the director of the Museum of Fine Arts, Gifu and a professor in the Department of Intermedia Art at Tokyo University of the Arts. Hibino holds a master's degree from Tokyo University of the Arts. Since gaining attention for his contemporary, cross-disciplinary aesthetic in the 1980s, Hibino has continued to explore his own potential by not only creating works but also using his own body as an artistic medium. He also holds workshops that bring him together with participants across the country, joining forces in creating ways for art to function in society.

みんなの居場所をつくりたい

美術作品というと、美術館で静かに鑑賞したり、値段をつけて評価したりする対象、というイメージが広くもたれています。でも僕は、アートの存在意義はそれだけではないと思うんです。

アートの魅力や役割や能力を、もっと社会のなかで機能させることができるのではないか。僕はそのための仕組みを、段ボールで作品をつくったり、船をつくって航海に出たりと、王道ではない方法で提示することを試みてきました。そういう活動のひとつとして、昨年、障害者支援施設にショートステイさせてもらったんです。最初はとまどいと不安が大きかったのですが、入所者の人たちと一緒に作品をつくったりして過ごすうちに、だんだんとそこでの自分の居場所がわかってきたんですよね。「TURN」は、その経験が出発点になっています。

世の中は、経済的に生産性のある人、能力のある人だけで動いていると考えがちですが、本当はそうじゃない。高齢者や障害をもっている人など、社会的弱者と呼ばれる人たちを含めたみんなが認め合い、共存できる社会にしていくべきです。そのためには、「バリアフリーになっているから、どうぞ入ってきてください」と招き入れるだけじゃなくて、こちらから入っていくことも必要だと感じました。「TURN」は、そのきっかけ作りとして、アーティストが媒体となって福祉施設同士、さらに施設と社会をつなぐプロジェクトです。

そして「TURNフェス」は、「TURN」のお披露目の機会。様々な福祉施設などでの交流を通して生まれたアーティストの作品をはじめ、施設に通う人たちとの共同制作でつくった作品も発表します。なかには来場者が参加したり、パフォーマンスのかたちをとったりするものもあるかもしれません。会場は美術館ですが、にぎわいのある場にしたいと思っています。

自分という人間は、ひとりしかいない。あとは全員他人です。生きるということは、障害の有無に関係なく、自分ではない人たちと一緒に過ごしていくこと。言葉や文字を使うのと同じように、アートもコミュニケーションの手段のひとつです。「TURNフェス」が、いろいろな人に出会える場、作品や直接の会話を通して、自分ではない人との距離が少しだけ縮まる場になればと思っています。障害者、高齢者、子供たち……みんなの居場所のひとつになるような空間にしたいですね。

海に起源をもつ僕たち人間が、もう一度海へと回帰するように、人がはじめからもっている力を見つめなおす。そこに、僕たちが忘れてしまったもの、見落としてしまっているものが見えてくるかもしれません。

アートを通じて誰かとの距離が少しだけ縮まる場

In art you can find a place where you're a little closer to others

Giving everyone a place to belong

People tend to think of art as something to be admired in quiet museums or appraised by critics. To me, though, art is about more than that.

I think that we can give the appeal and the roles and the capabilities of art a more functional place in society. My whole career, I've been trying to take unorthodox approaches to laying out the potential of art in a real-life context-making works out of cardboard, for example, and taking to the sea in a homemade boat. Last year, I had the opportunity to do a short residence at a support facilities for persons with disabilities. I was a bit nervous and unsure of what I was supposed to do at first, but I gradually started to feel like I belonged as I spent time creating artwork and living with the residents. That's where the concept for the TURN project took shape.

The prevailing assumption these days is that economic productivity and practical abilities are what keep the world spinning, but that's not actually true. We have to create a society where everyone-including the elderly, people with disabilities, and the so-called "socially vulnerable" among us — sees the value in one another and shares a common understanding of the need for co-existence. We often imagine places like facilities for those with disabilities as offerings to the people who use them: "This is a barrier-free facility, so come on in and join us," we seem to say, projecting the idea that we're opening doors to people on the outside — but why don't we try to step in from the "outside?" We have to "come on in," too. Hoping to give people more insight into that mindset, the TURN project makes artists the medium in linking welfare facilities with other welfare societies and forging stronger bonds between facilities and society as a whole.

The TURN Fes is a showcase of what the TURN project does. Works by artists who have translated their interactions at different welfare facilities and other settings into forms of creative expression will be shown. The event will also debut works by artist-facility user teams, and some of the pieces might even feature performance elements or get participants involved in the art. The event is going to take place at an art museum, yes, but don't expect a quiet, stuffy atmosphere: we're calling it a "festival" for a reason.

You are the only you there is. All the rest of the people in the world are others. Living means spending time and communicating with those others, regardless of whether they're disabled or not. Just like we use letters and words to convey messages to each other, we use art to communicate, too. I want the TURN Fes to be a place where participants can connect with a wide variety of other people — a place where you can experience art with others, talk face to face with fellow participants, and feel a little closer to those around you. I want the space to give everyone, from people with disabilities to children and the elderly, a place to belong.

The story of humanity began in the sea. Imagine returning to those origins and seeking out what we started with. That's the idea behind the TURN project: finding the innate strength that each of us has. In our quest for that intrinsic power, we might discover things we've forgotten and things we've let slip by.

PICK UP 2

日本美と伝統芸能の饗宴「FUJIYAMA」

The Beauty of Japan and a Feast of Traditional Performing Arts: FUJIYAMA

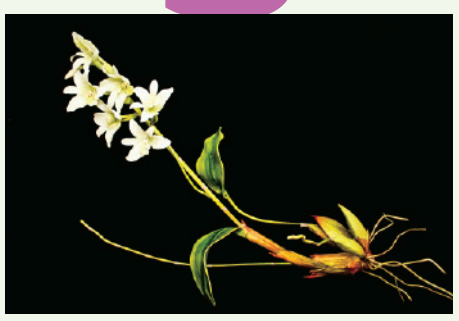
日本舞踊や落語、剣舞などの日本の伝統芸能を、エンターテイメント性たっぷりに楽しめる新春イベント。日本美の象徴、富士山をテーマに描く舞踊「八合目」と、藤間勘十郎をはじめとする豪華キャスト陣で上演する日本舞踊と殺陣のコラボレーション作品「日本武尊剣勇功（やまとたけるつるぎのいさおし）」は、この公演でしか観ることのできない新作です。さらに、柳家花緑による正月風情あふれる落語など、上演されるのは全部で5演目。「東海道中膝栗毛」の弥次さんと喜多さんが、わかりやすく公演をナビゲートします。劇場内には、伝統的なお正月遊びを体験できるコーナーも。

Kicking off the new year with an entertaining, five-part showcase of Nihon Buyo (Japanese Dance), sword dancing, and more traditional Japanese arts, this event is the only chance to catch two new dance pieces: "Hachigome," a buyo performance that evokes Mt. Fuji (FUJIYAMA), a classic symbol of Japanese beauty, and "Yamato Takeru Tsurugi no Isaoshi," a fusion of Nihon Buyo and theatrical combat starring Kanjuro Fujima and a star-studded cast. Karoku Yanagiya will also give a New Year-themed rakugo performance. Yaji and Kita, characters from the 19th-century comic novel *Tokaidochu Hizakurige*, will emcee the show, segueing between performances and giving guests interesting information on each part of the program. Rounding out the fun at the theater will be an "experience area," where guests will be able to take part in fun Japanese New Year's traditions.

日時／平成28（2016）年1月2日（土）12:30開場、13:30開演　**会場**／明治座　**URL**／www.en.meijiza.co.jp

Date/Time: 1.2 (Sat), 2016; Start: 13:30 (doors open at 12:30) **Venue:** Meijiza **URL:** www.en.meijiza.co.jp

PICK UP 3



クリス・チョン・チャン・フイ《END74 Pholidota sigmatochilus》
「固有種」シリーズより、2015年

Chris CHONG Chan Fui, *END74 Pholidota sigmatochilus*, from "Endemic" series, 2015

第8回恵比寿映像祭

Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2016

アートと映像の国際フェスティバル、恵比寿映像祭の今回のテーマは、「動いている庭」。現代社会を日々変容する庭ととらえ、映像やメディア表現を通して、自然と人間との関係性、現代社会の自然ともいえる事象である不可視のネットワーク社会や都市環境などを探ります。恵比寿の複数の会場で、映像作品の上映、インスタレーション作品の展示、シンポジウムなど多彩なプログラムを展開。出品作家は、ジャナーン・アル=アーニ、クリス・チョン・チャン・フイ、中谷芙二子、クワクボリョウタ、ベン・ラッセルなどを予定。「動いている庭」という新しい解釈を手掛かりに、現代のイメージ世界を旅します。

The theme of Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2016, a cross-border celebration of art and visual media, is "Garden in Movement." Operating from a perspective that sees modern society as a constantly transforming "garden," the festival will explore not only the relationships between nature and humanity, but the invisible network society and urban environments, that is as close to us as nature in modern life, through a wide array of media expressions. Several venues in Ebisu area will host a wide-ranging program including screening, installations, and symposia. Artists scheduled to be present at the Festival include Jananne Al-Ani, Chris Chong Chan Fui, Fujiko Nakaya, Ryota Kuwakubo, and Ben Russell. Taking a walk through the "Garden in Movement", visitors will step into a world of contemporary imagery.

日時／平成28（2016）年2月11日（木・祝）～20日（土）10:00～20:00 ※最終日は18:00まで　**URL**／www.yebizo.com
会場／ザ・ガーデンホール、ザ・ガーデンルーム、恵比寿ガーデンシネマ、STUDIO 38、恵比寿ガーデンプレイス センター広場、日仏会館 ほか

Date/Time: 2.11 (Thu) – 2.20 (Sat), 10:00 – 20:00 *Closes at 18:00 on 2.20 **URL:** www.yebizo.com
Venues: The Garden Hall, The Garden Room, YEBISU GARDEN CINEMA, Studio 38, Center Square of Yebisu Garden Place, and the Maison Franco-Japonaise, etc.

PICK UP 4

宮島達男《Counter Void》2003年
Tatsuo Miyajima, *Counter Void*, 2003

リライトプロジェクト Relight Days

Relight Project Relight Days

東日本大震災以降の社会において、アートが担うことができる役割を考えるプログラム。六本木けやき坂にあるパブリックアート作品《Counter Void（カウンター・ヴォイド）》は、震災直後、鎮魂の意を込めて作者・宮島達男自らの手で消灯されました。「Relight Days」では、この作品を、震災の記憶を社会に問いかけ続けるための装置として生まれ変わらせるべく、5年ぶりに点灯させます。ほかにも、公募で集まった「Relight Committee」のメンバーとともにアートと社会について学び、企画したシンポジウムやワークショップを開催予定です。

Relight Days focuses on one core theme: the role of art in post-3.11 Japanese society. In the aftermath of the Great East Japan Earthquake, the artist Tatsuo Miyajima switched off *Counter Void* — his public artwork in the Keyakizaka area of Roppongi — in a sign of respect for those who had lost their lives in the tragedy. The Relight Days will bring *Counter Void* back to life, aiming to give the work a rebirth as an installation that sustains the memories of 3.11 and continues to pose questions to society. Participants will also have the chance to join the Relight Committee, comprising members of the general public, in learning about art and society and developing symposia and workshops.

日程／平成28（2016）年3月11日（金）～13日（日）※詳細な時間・内容は決定次第、公式ウェブサイトで発表します。
会場／六本木ヒルズけやき坂《カウンター・ヴォイド》ほか　**URL**／relight-project.org

Date: 3.11 (Fri) – 3.13 (Sun), 2016 (More information on times and project details will be posted on the official website.)
Venues: Roppongi Hills *Counter Void* (Keyakizaka), etc. **URL:** relight-project.org/en

INFORMATION

助成プログラム公募開始について

アーツカウンシル東京では、東京の芸術文化の魅力を向上させる活動や、世界に発信していく創造活動を支援するため、発信力のある活動を行う団体等に対する助成を実施しています。平成28年度の助成プログラムは、1月中に公募を開始する予定です。 詳細は決定次第、公式ウェブサイトで発表します。

Applications for Arts Council Tokyo Grant Program to open soon

Arts Council Tokyo provides financial support to artistic and cultural organizations with the ability to enhance the quality of Tokyo's arts and culture and represent those important assets nationally and internationally. The application for its FY 2016 Grant Program will open in January 2016. For information on the Grant Program in English, contact us via the form on the Contact page of the official website.

Web

イベントなどの詳細は、
公式ウェブサイトとSNSから！
Check the official website and SNS for event details!

www.artscouncil-tokyo.jp
www.artscouncil-tokyo.jp/en

アーツカウンシル東京
@artscouncilTYO

Newsletter

アツカンのおすすめ情報を日英バイリンガルでお届けするメールニュースを配信中です。登録は、公式ウェブサイトから。ぜひご利用ください！

登録はこちらから　www.artscouncil-tokyo.jp/ja/newsletter

Offering a bilingual (English-Japanese) newsletter with information from Arts Council Tokyo. Please sign up for a subscription through our official website!

Subscribe Here　www.artscouncil-tokyo.jp/en/newsletter

Radio

東京文化のライブな情報をオンエア中
Broadcasting live information about culture in Tokyo

J-WAVE（81.3FM）『ARTS COUNCIL TOKYO CREATIVE FILE』

渡辺 祐 × 山田玲奈　Tasuku Watanabe × Rena Yamada
毎週土曜日11:35～11:45（ワイド番組「RADIO DONUTS」内）
Saturdays, 11:35–11:45 (A segment of the "RADIO DONUTS" show)

www.j-wave.co.jp/original/creativefile

Dear TOKYO

［ディア・トーキョー］

文：小西康陽
Text by Yasuharu Konishi

写真：高橋マナミ
Photograph by Manami Takahashi

日の出桟橋から船に乗って

Taking a Boat from Hinode Pier

お誕生日に、どこか行きたいところはある？　そう尋ねると、水上バスに乗りたい、という。デートといえばいつも名画座で旧い映画を観るばかりだったから、誕生日くらいは彼女の言う通りにしよう、と考えていたが、水上バスとは予想もしていなかった。

土曜日の午後。日の出桟橋で二時に待ち合わせ、と決めていたのに、都営浅草線・大門の駅を出たところでメールが届く。ちょっと用事が出来ました。水上バスにはひとりで乗ってください。地下鉄で浅草に向かいます。神谷バーの前で。

発着所でチケットを買い、二時半の出発を待った。自分の前にはふた組の家族連れが並ぶだけだったが、出発時間が近付くにつれて団体客が後から後からやってくる。乗客もまばらな、のんびりとしたフェリーを想像していたのだが、そうではないようだった。

間もなく乗船が始まり、さっそく船尾のベンチに座る。すぐ後から乗ってきた若いカップルが自分の斜め右に座って嬉しそうにしている。この最後尾のデッキが観光客や恋人同士には最上の席なのだと、座ってから知った。

驚くほどの乗客を飲み込んで、船は出発する。さっそく若いカップルはスマートフォンで自分たちふたりの写真を撮り始めた。なかなか美男美女のふたりが、やたらとしかめ面を作っている。彼女が予定通り船に乗っていたら、自分たちもこんなふうにカメラを構えただろうか。

デートには申し分のない快晴の日。風と波しぶきが本当に心地よい。カップルと観光客と家族連ればかりの船に独りで乗るのも、それはそれで楽しい。目的地に待っている人がいるのなら。せめて誕生祝いの花束でも買っておくのだった、とようやく気づいた。

黄色にペイントされた蔵前橋。緑色の厩橋。青の駒形橋。そして赤い吾妻橋。船を降りて道案内に沿って進むとすぐに交差点に出た。台東区浅草一丁目一番一号。神谷バーの正面に彼女は待っていた。この日のデートはここからが長かった。

When I asked her, “Is there somewhere you want to go on your birthday?” she said, “I want to take the water bus.” Whenever we went on a date, we would go to see an old movie at a revival house, so I was thinking I’d at least do what she asked on her birthday. But I hadn’t imagined that she’d want to take the water bus.

Saturday afternoon. We had arranged to meet at 2 p.m. at Hinode pier, but just as I came out of Daimon Station on the Toei Asakusa Line, I received an e-mail: “Something has come up. Can you take the water bus by yourself? I’ll take the subway to Asakusa Station. See you in front of Kamiya Bar.”

I got a ticket at the water bus station and waited for the 2:30 departure. In front of me there were only two families waiting at first, but as the departure time approached, more and more groups showed up. I had pictured an easygoing ferry ride with a few passengers scattered here and there, but it seemed I’d been wrong.

Soon boarding started, and I immediately sat down on a bench at the stern. The young couple who boarded the boat just behind me sat down to my right diagonally. They looked happy. After sitting down I realized that this stern deck was the best place for tourists and couples.

Having taken on an amazing number of passengers, the boat started off. The young couple immediately started taking photos of themselves with their smartphones. This good-looking pair were scowling profusely. If my girlfriend had boarded the boat as planned, would we have been taking photos like that?

A lovely, sunny day, perfect for a date. The wind and sea spray felt really nice. Taking a ride by yourself on a boat filled with couples, tourists and families is actually fun in a way — if there’s someone waiting for you at the destination. I finally realized I should at least have bought her flowers for her birthday.

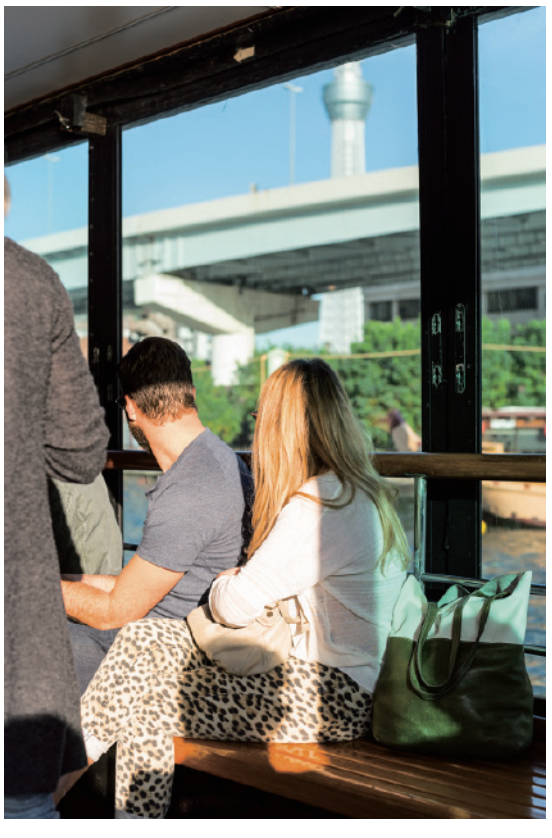
Kuramae Bridge, painted yellow; Umaya Bridge, painted green; Komagata Bridge, painted blue; and Azuma Bridge, painted red. I got off the boat and followed the street map, and soon I came to an intersection. I saw I was at 1-1-1 Asakusa. She was waiting in front of Kamiya Bar. It was just the beginning of our long date.

小西康陽

音楽家。1985年、ピチカート・ファイヴのメンバーとしてデビュー。2001年の解散後も、数多くのアーティストの作詞／作曲／編曲／プロデュースを手掛ける。2011年、PIZZICATO ONE名義で初のソロアルバム『11のとても悲しい歌』を発表。今年、セカンドアルバム『わたくしの二十世紀』を発表。著書に『僕らのヒットパレード』（片岡義男と共著）ほか。

Yasuharu Konishi

Musician. In 1985 he made his debut as a member of Pizzicato Five. Since that group disbanded in 2001, he has been active as a lyricist, composer, arranger and producer in collaboration with numerous artists. In 2011 he released his first solo album, *One and Ten Very Sad Songs*, under the name Pizzicato One. This year sees the release of his second album, *Watakushi no Nijuseiki* [My 20th Century]. His books include *Our Hit Parade* (co-authored with Yoshio Kataoka).



← 東へ西へ →

Notes from East & West

Life in a woodland town within commuting distance of Shibuya

It's been five years since, through a chance series of events, I moved to Musashi Itsukaichi, Akiruno. Previously I lived for a long time in the Shitamachi of Tokyo, and I'd been roaming around the Kanto outskirts hoping to find a place with more comfortable surroundings where I could live long-term, on the condition of continuing my work based in Shibuya. At the time, I didn't think I would end up moving to a place within the Tokyo metropolitan area. But I found the town of Akiruno, connected to the Ome Line by the single-track local Itsukaichi Line, to be a very pleasant place. The slight inconvenience is more than made up for by the lovely location, with abundant woodlands on all sides; the distinctive history and culture, centered around the forestry industry of the former town of Musashi Itsukaichi; and the fascinating diversity and depth of the woodland villages.

There's river swimming, sweetfish and trout fishing, barbecuing… the town nestled along the generously flowing Akigawa River, and compact swathes of woodland in which this town is completely surrounded by mountains. And if you go for a drive, in no time at all you can reach villages situated deep in the mountains. Daily life here is quite nice.

I was hoping to strike a balance with my busy working life in central Tokyo and gradually expand the scope of my activities in the local area as well, when the town development community "Itsukaichi Goen Bunko" (Itsukaichi Connections Branch School) began on the occasion of a music festival held in 2014. This spring there was also a mini-festival in a formerly closed elementary school, and a circle of people has come together in lively and leisurely ways. Life in Akiruno is going to be even more enjoyable from now on.

渋谷に通勤できる里山の街ぐらし

ご縁があってあきる野市武蔵五日市に移り住んで5年になります。渋谷を拠点に仕事を続けていく前提で、長く住んだ東京の下町から、もっと環境の良い長く住める場所をと思って関東外周部をきょろきょろしていました。その時は移住先が東京都内になるとは思っていませんでしたが、青梅線から単線ローカル五日市線でつながったあきる野の街は、ちょっとだけ不便な代わりに、豊かな里山に囲まれた広がりが心地よく、旧武蔵五日市町の林業を中心とした歴史文化と山里の多様と奥深さも味わい深い、気持ちの良いところでした。

川泳ぎにアユ釣りヤマメ釣りにバーベキュー、秋川の豊かな流れに寄り添う街と、その街が丸ごと山に囲まれたコンパクトな里山の広がり。さらに車で走れば奥深い山里にもあっという間にたどり着き、地元で過ごせる日々はなかなかです。

忙しい都心での仕事と折り合いをつけて、少しずつ地域での活動も広げていきたいと願っていたら、2014年の音楽フェスをきっかけに、まちづくりコミュニティ「五日市ごえん分校」が始まり、今年の春には廃校になった小学校でのプチフェスも開催、色々賑やかにゆっくり人の輪も繋がってきました。これからがますます楽しみなあきる野暮らしなのです。

鈴木幸一　Koichi Suzuki

アースガーデン代表。オーガニック＆エコロジーをテーマにイベント企画制作を続け、音楽フェス制作でも活発に活動、2006年には著書「フェスティバル・ライフ」を上梓。

Director of Earth Garden. He continues to plan and produce organic living/ecology-themed events, and is also actively engaged in the production of music festivals. In 2006 he published the book *Festival Life*.

三方を山に囲まれたあきる野の街は、どちらを向いてもすぐそばに山が迫る環境と、ショッピングモールなど街の便利さが、ほどよく交わっています。

The town of Akiruno is surrounded on three sides by mountains. The close proximity of mountains all around, and the convenience of shopping malls and other features of town life, are combined in a balanced and comfortable way.

秋川渓谷での音楽フェス開催から、廃校を会場にした手づくりフェスへと、「五日市ごえん分校」を軸にしたまちづくりが前に進んでいます。

Since a music festival was held in the Akigawa Valley, followed by a handcrafted festival held in a formerly closed school, town development centered around "Itsukaichi Goen Bunko" (Itsukaichi Connections Branch School) has been moving forward.

フェスの中での学習ワークショップ企画から、日常的なコンサートやワークショップ、ミーティングまで、様々な集いがこれからのまちと人の輪を育み始めました。

The circle of town and people connections is now being cultivated through a variety of gatherings, from study workshops within the framework of festivals to everyday concerts, workshops and meetings.

わたしの滞在記

My Tokyo Diary

べにや民芸店　Beniya Folk Crafts Shop

Tokyo.

My favorite thing to do in Tokyo is to look around the mingei shops. There are three that I visit regularly, Beniya in Aoyama, Bingoya in Shinjuku Wakamatsu-Cho and Takumi in Ginza. There used to more and there were many mingei coffee shops, bars and restaurants, too. However, the popularity of mingei which waned during the 1980s and 1990s putting some of these places out of business, has now revived in the 21st Century and now a plethora of online shops and bricks and mortar lifestyle shops are briskly selling mingei to young people.

But briskness is not what I find at Takumi, which first opened its doors in 1933, or at the other old mingei shops I visit. Usually its cups of tea, enquires about my well being, and a long chat about some interesting craft object consigned to the store by the family of an aged collector.

The Mingei Movement led by the philosopher Soetsu Yanagi and the potter Shoji Hamada was started in the 1920s to "rescue the common crafts which have been brushed aside and overlooked by the industrial revolution". The Japan Folk Crafts Museum (Nihon Mingeikan) was built to house collections of craft objects and Takumi was started to serve as the movements' retail arm. That both places are going strong today is testament to the power of the vision of their founders and the deep affection that the Japanese have for folk crafts.

To be classed as mingei and object has to be functional in daily life, traditional to or representative of a region, and produced inexpensively by hand in quantity by anonymous craftsmen. Bearing such strict criteria in mind the range of goods these shops stock, both homely and exotic, is staggering. Woven and dyed textiles from all over the world, jewellery, furniture, clothing, pottery...lots of pottery, glass, metalwork, wood carvings, cook pots, books, masks, baskets, string bags used by head hunters...this is shopkeeping on a grand scale in confined spaces. A treat for the eye, the hand and the nose.

Shopping as inspiration? Yes, for me at any rate Tokyo's mingei shops serve as lecture rooms, tea houses and art galleries. The city would be a poor place without them.

東京

東京での私のお気に入りの過ごし方は、民藝品店を見て回ること。定期的に行く店は三つで、青山の「べにや民芸店」、若松町の「備後屋」、銀座の「たくみ」。昔はもっと色々な店に行っていた。民藝コーヒー店、バー、レストランといった店も多くあった。1980〜90年代に民藝品の人気が下火になった結果、閉店した店もある。一方で21世紀になると民藝品の人気は再燃し、今では若者に民藝品を売るオンラインショップやライフスタイルショップが巷に溢れ、活況を呈している。

ところが1933年開業の「たくみ」をはじめ、私がよく行く古い民藝品店にはそのような活況とは違った雰囲気がある。店に行くと大抵お茶が出てきて、店にいる人たちが「最近どうだい？」と声をかけてくれ、年配のコレクター家族から引き取った興味深い民藝品についての長々としたおしゃべりが続く。

民藝運動は、1920年代に哲学者の柳宗悦と陶芸家の濱田庄司らの先導により「産業革命に押しのけられ、見過ごされてきた民衆工芸品を救う」ために始められた。工芸品のコレクションを収容するために日本民藝館が設立され、小売店の役割を担う店として「たくみ」が開業。どちらもなお衰えることなく続いているという事実は、創設者たちの先見の明の証であり、日本人の民藝品に対する深い愛情の証でもあるだろう。

日常生活において機能的であること、地域の伝統的もしくは代表的な品であること、無名の職人により安価で大量に製造されていること。それが、民藝品の条件だ。このように厳密な基準があるのに、簡素なものから変わったものまで、品の幅が広くて圧倒される。世界中の織物や染物、装飾品、家具、衣類、たくさんの陶芸品、ガラス、金属細工、木彫り、鍋、本、お面、籠、首狩族の編み袋……、限られたスペースにこれだけのものが詰まっているのだ。それは目や手や鼻にとって、この上ないご馳走だ。

買い物がインスピレーションを与えてくれるかって？　私の答えは間違いなく「イエス」。東京の民藝品店は私にとって講義室であり、お茶室であり、アートギャラリーでもある。民藝品店がなければ、この街はさびしい場所になってしまうだろう。

文：**テリー・エリス**
Terry Ellis

1986年よりビームス ロンドンオフィスとしてバイイングを担当。2003年からは"デザインとクラフトの橋渡し"がテーマのレーベル〈fennica〉をディレクションしている。

Became a buyer at the London Office of Beams in 1986. Since 2003 he has been directing the "fennica" label, whose theme is "to serve as a bridge between design and craft."

COMIC

東京にはいくつかの富士山があって、そのうちひとつが品川にある。

長崎訓子

There are several Mt. Fujis in Tokyo. One of them is in Shinagawa.

Japanese people love Mt. Fuji.

Wouldn't it be nice to have a Mt. Fuji right in the area?

Edo era people loved interesting things, and they were quite impatient.

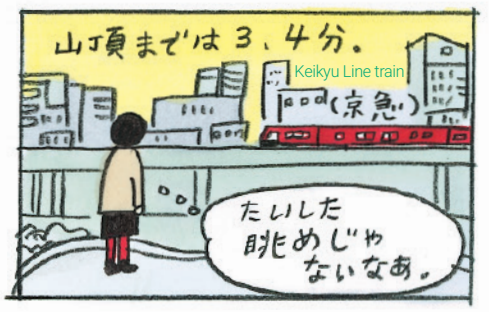
It's so much trouble to go all the way to Mt. Fuji...

So they made miniature Mt. Fuji, called Fujizuka.

You can climb it fast — it's very convenient!

Shinagawa Fuji, at Shinagawa Shrine

To the Shinagawa Shrine precincts



It takes 3 or 4 minutes to get to the top.

Hmm... not such an impressive view.

There are only buildings, but in Tokyo that's natural — maybe it's "nature."

Buji Kaeru (In Japanese, Buji Kaeru has two meanings: "return home safety" and "safety frogs.")

Uh-huh, maybe.

長崎訓子

イラストレーター

1970年東京生まれ。
書籍の装画や挿絵、映画に関するエッセイなど多方面で活動中。
主な装画の仕事として『武士道シックスティーン』『億男』など。
漫画の作品集に『marble ramble 名作文学漫画集』がある。

Kuniko Nagasaki

Illustrator

Born in 1970 in Tokyo.
Works in various genres, including book illustration and cover design, and essays on movies.
Her illustrations include the covers of such books as *Bushido Sixteen* and *Oku Otoko* [Million Dollar Man]. Among her cartoon works are *marble ramble Meisaku Bungaku Manga shu* [marble ramble Famous Works of Literature in Cartoon Form].

VOL.11 研究ノート RESEARCH NOTES

東京はピクセルの集まりみたいだなと思います。誰もがその一部になれるけど、そのものにはなれない。根無し草にとっては一番の味方です。(**キム**)／約15年前、念願叶って働き出した東京のレコード会社。当時まだ学生だった私は、千葉県柏市から表参道まで地下鉄千代田線で通っていました。希望に満ちた私を東京へと運んでくれた千代田線。今も特別な存在です。(**水島**)／街は記憶の集合体。その人が明かすことでしか現れてこないごく個人的なストーリーが、そこら中に息づいている。(**平林**)／私自身の東京の居場所としてぱっと思いついたのは、とある公園内の、今はなき大きな温室。あと少しだけこの温室の思い出にひたりつつ、新しい居場所を探してみようと思います。(**菅原**)／自分にとっては何でもなくても、誰かにとっては特別な場所、人、こと。他者の視点を知ることで、見慣れた街並みにも新たな魅力が見つけられそうです。**(TAKAIYAMA inc.)**

I think Tokyo is like a collection of pixels. Anybody can be part of it, but they cannot become it. For the wanderer, it's a best friend. **—Kim** / About fifteen years ago, my dream came true when I started working at a record company in Tokyo. At the time I was still a student, and I commuted from Kashiwa in Chiba Prefecture to Omotesando on the Chiyoda subway line. The Chiyoda line brought me to Tokyo, filled with hope. Even now it means more to me than just a subway line. **—Mizushima** / The city is an amalgamation of recollections. Extremely personal stories that only come to light if that person reveals them are out there, living and breathing. **—Hirabayashi** / What immediately comes to mind as 'my place' in Tokyo is a big greenhouse in a certain park which isn't there anymore. I'll stay immersed in memories of this greenhouse for a little while longer, and then I'll look for a new place. **—Sugawara** / Even if it's nothing to you, for someone it's a special place, or person, or thing. You can almost find a new charm to familiar streets by knowing how another person looks at them. **—TAKAIYAMA inc.**

TOKYO PAPER for Culture vol.011

オルタナティブトーキョー

ディレクター：森隆一郎 / アツカン　**編集ディレクション・執筆：**水島七恵　**編集部：**浅野五月、キムキョンナ、里見恵利華 / アツカン　**編集・執筆：**平林理奈 (P12～P13) / Playce
執筆：平林理奈 (P10)、菅原淳子 (P11) / Playce、仲野聡子 (P9、P11)　**アートディレクション & デザイン：**TAKAIYAMA inc.　**写真：**平野太呂 (表紙、P2～P5)、竹之内祐幸 (P6～P11)、藤田慎一郎 (P12)
撮影協力：築地場外市場 (P2、P3)、奥野ビル (旧・銀座アパートメント) (P4、P5)、千代田区立日比谷図書文化館 (P9)　**翻訳：**オフィス宮崎　**印刷：**太陽印刷工業株式会社
発行：アーツカウンシル東京 (公益財団法人東京都歴史文化財団)　**発行日：**2015年12月9日　禁・無断転載

アーツカウンシル東京 (公益財団法人東京都歴史文化財団)　〒102-0073　東京都千代田区九段北4-1-28 九段ファーストプレイス8階　TEL：03-6256-8432　FAX：03-6256-8828
Arts Council Tokyo (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture) Kudan First Place 8F, 4-1-28, Kudankita, Chiyoda-Ku, Tokyo 102-0073 TEL: +81(0)3-6256-8432 FAX: +81(0)3-6256-8828

ARTS COUNCIL TOKYO